
ワールドエンドによろしく！

嘘月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ワールドエンドによろしく！

【Nコード】

N9669Z

【作者名】

嘘月

【あらすじ】

誰よりも理想主義者な偽現実主義者 彩瀬^{あやせ} 翔生^{かなる} ある日、彼は一人の儚げな少女と出会う。World End 彼女はそう名乗った。翔生を中心に狂いだす世界。何気ない日常を世界の終わりから守る日々が始まる。

World end (前書き)

初投稿させてもらいます。至らぬ点だらけでしょうが、生ぬるい目で見ていただけたらと思います。ご意見は真摯に受け止めたいと思っていますので、何か頂けたらと思っています。よろしく願います。

w o r l d e n d

風が吹いた。

少女の髪は流されて、形が無くなる。

酷く醜く人で混雑した交差点を滑らかに、流れるかのように避けながら。

誰かに触れる事なく踊るように、誰かを恐れるかのように慎重に。
誰よりも世界を愛した少女が天を仰ぐ。

誰かが呟いた。

「世界が終わる」

そう呟いた気がした。

起立と礼を終えて放課後の教室を誰よりも早く出る。

季節は春から夏へ切り替わり、ようやく夏らしくなってきた7月。

汗ばんだ肌にYシャツという組み合わせは最高に気持ち悪い。

「じゃあな彩瀬^{あやせ}」

「おう、またな」

高校2年生のこの時期は世間が騒がしくて嫌気が差す。

部活のインターハイ？夏に向けて彼女ができました？国立大学目指して受験勉強？

クソくらえ

インターハイ行ってもプロになるのは一握りだ。社会の役に立つ？人並みに生きていたら人並みに挨拶も礼儀もできる。

彼女ができた？好きな人ができた？一時の感情に身を委ねて、感情の逃げ場を作ってるだけに過ぎない。結婚前提か？結婚したら本当に幸せになれるのか？

レベルの高い大学に行って満足か？そこでのお前は輝いているのか？くだらない能書きにしか頼れないガリ勉野郎か？

もつと現実を見る、何が効率のか何が利益になるか考えていけ。

……と言っても、主観的にも客観的にも一番損してるしてるのはやつぱり俺だった。

友達を作るのは苦手ではない。年上と話すのも苦手ではない。世間と関わるのも苦じゃない。理想を追い求めるのは誰よりも好きだった。

俺 あやせ 彩瀬 かなる 翔生は、誰よりも理想を追い求めていたに違いない。バスケットボール部に入り、持ち前の運動神経と身長を活かし、チームのエースという座を手にした。

県のチームでは俺を知らない選手なんていなかった。だからこそ、特待生としてこの高校に推薦で入学する事が出来た。

この先俺は何処までも理想を追い求められる、そんな事まで実感していたんだ。

そんな毎日に生き甲斐を感じていた矢先に、バスケットを始めるきっかけをくれた先輩が交通事故で手首を無くした。

彼のシュートフォームはまるで理想そのものだった。

そんな先輩が格好良くて、俺はバスケットを始めた。

理想を求めて、何かに打ち込む日々が終わる音。

俺はバスケットなんか好きじゃない事に気づいた。

俺が好きなのは理想を追い求める自分。

理想が朽ち果てた時、その理想を越えたような空虚が襲った。

何か一つを努力なしで終わらせてしまったような、至極極まりない背徳感。

俺なんかよりもずっと素晴らしい選手で、俺なんかよりもずっと将来性のあつた先輩、そんな先輩の両手首から先が空と交わっていた。

沈黙の続く病室の中でこう言われた。

「お前は俺のバスケットをしてくれ、お前は俺だ。最後の希望って奴なのかもしれないな」

その言葉の重みに耐え切れなくなつた俺は、逃げるかのようにバスケットをやめた。

わかつていた。先輩の求める理想を追いかけるべきだと。それが先輩への恩返しでもあつて、先輩が望む理想だと。理想は何よりもリアルである。

何かを手に入れようとすれば何かを失い、ときには手に入れようとしたものさえ消えてなくなる。

先が見えているなら、最初からしなければ良かった。

理想を失つた俺には何も無かつた。

きっとそのまま続けるという選択肢もあつたに違いない。

それをしなかつたのは何故だろうか。

考えたくもなかつた。

高校1年生の冬に、俺は世界とやらを憎んだ。

それがこの捻くれた性格の理由。

これからもきつと、自分の首を絞め続けるだけの思い出になるだけなのだろう。

「なーに辛気臭い顔してんだ!」

「!?!?.....後ろから押すなよ、倒れるとこだったぞ」

「ははは、わりいわりい。どうよお茶でもしないか?我が親友」

「いや、いい」

「そんな気分じゃねえか……じゃあうち来いよ、お気に入りの格闘技見せてやるよ！まじすげえんだぜ！」

こいつ、井上隆二いのうえりゅうじは中学校からの友人で今も同じクラスの腐れ縁だ。俺がバスケットをやめてから心配して余計に絡んでくるようになったわけで、親友なんて大それたものではない。

井上は街の不良5人に絡まれても無傷だった、なんて噂もあり学校ではちょっとした有名人だ。

「お前と格闘技を見たら、俺がお前の技の餌食になるよな？いつも」

「お前もかかってこいよ！その方が盛り上がるだろ！」

「痛いのは嫌いだ。特に脳筋のお前となんて断固拒否する」

「それは残念だ、勉強のし過ぎは体に味噌だぞ？」

「……それを言うなら身体に毒な」

「あ、あー変わらないだろどっちでも」

毒と味噌が変わらないなら日本人は妖怪か新人類なんだが。

「ま、いいや！もう少し楽しく生きようぜ翔生」

「十分充実しているけど？」

「俺の目は誤魔化せねえよ。お前はもつと刺激を求めてる。違うか？」

「……お前の目も腐ったもんだな、刺激なんてリスクと同義語だ。自分のリスクになる事なんて望んでいないさ。帰り際に理科実験室で防腐剤でも貰って来い。ちゃんと注意事項読んで使えよ」

「あ、あれえ？そこはもつとこ……流石俺の親友、やつぱなんでもお見通しだな！的な流れだったろお」

「他人から出直して来い」

「そこから！？」

「……ありがとな」

「んー……そっか、また鑑賞会に誘うわ。じゃあな」

また誘われるのか……そう思いながらもしっかりと馬鹿な友達と別れる。

下校途中の生徒の群れに混じり、何の捻りも無い背景へと身を委ねた。

刺激の強い楽しい人生……か。

そんな人生はたしかに魅力的だ。

ただ、それは成功例としてであって、必ずしも、そのリスク、つまり犠牲を支払って絶対に手に入れられる対価ではない。

そんなものには魅力がない。自分が頑張った分だけ落胆するならば、そんなものはただの悲劇でしかない。

酷く捻くれた性格にもそろそろ自己嫌悪し飽きていた。

何か世界を狂わすきっかけもあるハズもなく。

世界を変えたいだなんて妄言に誰も耳を傾けてくれない。

どこまでいっても、結局俺は理想に憧れ続けているだけだった。

いつも通りに騒がしい街の表通りへと差し掛かる。

下を向いて歩くサラリーマン、笑いながら帰る学生、こうして冷静に見るといつもあるのは現実。

裕福な国だ、平和な国だなんて世界で言われているが、結局それは隣の芝生って奴であって……何が起ころうともきつとこの世界は変わらない。

そう、きつと……何も変わりはないんだ。

「え？」

本物の風景の中に、今何かが”存在”した

たしかに、今非現実的な存在があつた気がした。

ここだと言わんばかりに主張するかのような違和感。

真っ白い髪を靡^{なび}かせて、踊るように人ごみを掻き分けていく。

そんな異質な存在に、誰一人目を向けなかった。

何かに惹かれて、ただその白い軌跡を追うことにした、まだ暑い猛暑を奮う7月の良く晴れた日。

「私の事、見えるんだね」

俺は世界とやらに出会った。

廻り始めた世界

「私の事見えるんだねって……はは、どういう意味だよ」
額から変な汗が出た。

周りの風景は、ただ日常を映して流れていく。

何も変わらないハズだ

現に何も変わっていない。

それなのに身体が震える。まるで白昼にお化けでも見たような。

そう……お化け？

「そのまんまの意味だよ、私に見える人は私を救ってくれる人。そうでしょ？」

通行人が俺達を腫れ物でも見るような目で見る。

いや、正確には”俺”だけを見ている。

目の前の少女……と言っても同じ位な年の訳だが、絶世の美女と言っても過言ではないこの子の方が人目を引くハズなのだが。

どういう訳か、通行人は俺だけを、見ては見ぬ振りして遠ざかっていく。

「なんなんだ……？」

まるで他の人には彼女は存在していないように、この女の子は明らかに現実離れしていた。

「初めまして、世界の救世主さん？私は世界、ワールドエンドと言います。これからよろしくね？」

電波だ、完全に現実を見失っている。この子はどこか頭が可笑しい子なんだ、可哀想に。

「面白い遊びをしているね。でも俺は暇じゃないからまた今度」

「え、ええ！？あ！そっか……えっと……人間にはハルマゲドンって言った方が早いのかな？あれ？あれ？」

「……」

「ひどいっ！！商品裏のバーコードでも眺めるかのような眼差し！？」

どうやら世界とやらは俗物に染まりきっているらしい。

この調子じゃ当分先までこの世界は安泰だ。

早める足に必死に謎の少女は付いて来る。

「信じてください！たしかに今までの危機を救ってくれた方も、最初は似たような反応をしていました。けどあんまりです……」

俺の他に何人に声を掛けているんだこいつ。

「あ、あの！聞いてます？無視ですか！？あれ？見えてない？おい！ここですよー！」

そう言つて目の前で両手を広げて振り回している。

「あの……本当に迷惑だからやめてくれよ。君といると目立って仕方ない。同じ学校の人に出会つて変な噂が立つのも嫌なんだ」

少女は首を傾げて微笑んだ。

「大丈夫です。私を見えている人は貴方だけですよ？彩瀬翔生さんあやせかなる」

「いい病院を紹介しよ……なんで俺の名前知ってるんだ？」

得意げに目の前の少女は胸を張つて答えた。

「彩瀬翔生、17歳。私立さいなみ小波学園2年生、文武両道、バスケットボールが仕事の現実主義者」

「え……？」

「小学4年生の頃に両親が海外へ、それ以来一人暮らし。妹は完全寮制の14歳、趣味は暴力」

おいおい。

「世界を変えたいと願う貴方の救済を、私、ワールドエンドは承諾します」

何者だ？この女、俺のことは兎も角、妹の事を知っているのはごく一部のハズ。

「私はワールドエンド、世界の終焉。人は私を神と呼び、宇宙と呼

び、空気と呼び、歴史と呼び」

少女が白く輝きだす。

その異様な姿にも、歩み往く人々の視線は止まらない。

「世界と呼びます。さあ、手を」

白く伸びた腕が、俺に向かって差し出される。

握ってしまいたくなる美しさに惑わされ……。

手を伸ばそうとした刹那、その手は宙を握った。

「え？」

「え？」

目の前に出現する、異質な球体。

急に出現したその黒い球体が少女を丸ごと飲み込んだ。

少女は、一瞬にして消え去ってしまったのだ。

「あ、れ？」

たしかに存在したハズだ。

一瞬の事で頭が状況に付いていけない。

「あ、あの！今ここにいた女の子何処に行きましたか！？」

気が動転してか、近くにいた通行人に俺は尋ねていた。

今、目の前で起きた出来事は、とてもじゃないが信じ難い。

すると、通行人の男は変なものでも見るかのように答えた。

「君さつきから一人で何喋ってるんだ？」

……っ！？

「な、何言ってるんですか……今いたでしょう？一緒に俺と話していた……白い髪の毛……綺麗な女の子が……」

白い髪の毛？綺麗な女の子？

果たしてそんな現実離れた女の子が、存在したのだろうか？

男は首を傾げて、これ以上は時間の無駄と察したのか、何も言わずに去って行った。

日常が崩れていく予感がした。

間違はなくイレギュラー。

日常を狂わすだけの出来事を確信した。

それでも。

『これが夢なら』と、そう願えなかった。

「……なんだっただ？あの子」

『現在、樽宮市たるのみやで起きている連続窃盗事件ですが、未だ犯人の消息は掴めていない模様です。警察によりますと、この事件には大規模な窃盗グループの関与が背景にあると見ているようです』

街中のスクリーンが映し出すのは、毎度のごとく同じようなニュース。

女の子、黒い塊、世界の救済

考えれば考えるほど真実味がなく、本当に白昼夢だったのかもしれない。

何とも言い換えられない違和感だけを胸に、ただ帰宅する他なく、
あやせかなる彩瀬翔生の一日は終わりを告げてしまう。

鎖

二つの影があつた。

一人はフードを被つた若い男。

そしてもう一人は、白色に靡く腰^{なび}まであるストレートヘアの美少女。男は少女を大切に扱っていた。

五体満足、拘束もなく、机の上にはたくさんのお菓子と紅茶、部屋は歪^{いびつ}に急いで取り繕つたような、一面のピンク。

呑気に紅茶を飲む少女と若い男を見て、誰がこれを誘拐と思うだろうか。

「ワールドエンドさん、そう気を悪くしないでくれ」

フードを被つた男はひたすら頭を下げる。

「いきなりこんな事をして本当にすまないと思っているよ」

「折角彼に信じてもらえそうだったのに……とんだ邪魔者だよ……」

「僕もこんな場所で」世界の終わり」と出会えるなんて思ってもいなくてね。少し強引でも、こうして話してみたかったんだよ。後悔はしてない」

少女は退屈そうに机の上のお菓子を転がして遊ぶ。

「初対面の人にする挨拶じゃないですね」

「どうも手癖が悪くてね……欲しいと願ったものはなんでも手に入れたいと思ってしまうんだよ」

部屋の隅に飾つてあるのは、どれもこれも高額な品ばかりだった。

「……あなたも能力者なの？」

「まあね、結構上手に使えるようになっただよ、ホラ」

そう言つて何も無い場所から黒い塊を出現させて、更に大量のお菓子を出して見せた。

「空間転移系ね、移動する物体の質量制限は飛び抜けてそうだけど

残念ね、貴方に用はないです」

無関心とソツポを向ける少女にも、男は気にしていないようだ。

「それで私に何の用ですか？」

「あ、ああ！そうだ！そうだとも！」

男は初めて興奮したかのように、初めて感情を手に入れたかのように、目を見開いて話し出した。

「ワールドエンドなんて存在、僕は実際信じちゃいなかった！そんな話を聞いた時から疑っていたさ！だけど違う！実際こうして目の前にしてみると信じてみたくなる。君は一体なんなんだい？」

「私の事を誰から聞いたの？」

少女の顔からは、徐々に余裕が消えていた。

自分を知っている事への恐怖が抑えられないようだった。

「そんな些細な事さ！僕は君を知りたい、なんで君がワールドエンドなんて呼ばれているのか？何故あの男が君を探していたのかを！知りたい！欲しい！あの男が欲しいが君が欲しい！！」

男はこれまでもなく喜び喘ぐ。

少女は窓の外を眺めた。

どうやら近くに遊園地があるようだ、ゆっくりと回り続ける観覧車を見ながら。

「……………私は……………」

少女は。

「なんだ今の…………？」

頭が痛い。

無理矢理よくわからない映像を見せられたような感覚だった。

時刻は深夜2時、横になってから30分も経っていない。

帰り道での出来事もあり、余計に疲れているのだろうか。

……帰り道？

夢と呼んでいいのかも怪しい夢を思い出す。

白い髪の少女がいた。

ワールドエンド、そう男は言っていた。

急に嫌な予感がした。

でも、何処にいるんだ？

少女の視界、映ったのは観覧車、街のシンボルになっている24時間回り続ける観覧車だった。

あの続きを、少女は何と言うのだろうか。

言いようのない確信を胸に、翔生は家を飛び出す。

目的の場所、樽宮遊園地へ着く。

夢で見た角度を頭の中でトレースする。

近場で、高くない建物、カーテンがなく、部屋の明かりは点いていて、とんでもなくメルヘン一色の……部屋。

「……本当にあった」

3階建ての建物の窓は一つだけ、薄いピンク光が灯る部屋だった。階段を駆け上がり、インターホンを押す。

すぐに男の声がした。

「はい？」

こんな夜遅くにインターホンを押されて警戒している声。

「す、すみません！ちよつといいですか？」

咄嗟に上手い言い訳も出来るはずもなく、曖昧な訪ね方をしてしまった。

ここで扉を開けてもらえなかったらそれまでというのに。

「ちよつと待っていてください。今開けます」

「は、はい！」

すぐに扉が開く。

フードを被った男が現れた。

男は翔生の顔を確認した瞬間、何かを思い出すように。

「！？お前！」

勢いよく扉を閉めようとした。

だが、その反応は想定してる範囲だ。

素早く足を扉に挟めて、閉めれないようにする。

「ちよつと中に入らせてもらいますよ！」

無理矢理に扉を抉じ開ける、腕力では勝っているように思っていたより簡単に中に入ることが出来た。

男を押しのけ、リビングへと向かうと、そこには。

「あ、あなたは！やっぱり来てくれたんだね」

そこには、優雅に紅茶を飲む数時間前に出会った少女がいた。

「よくわからないけど、あれ見せたの君なんだろう？」

「うん、私が見せました。信じて来てくれるかは半信半疑だったんだけどね」

と悪戯に舌を出してウィンクされる。

……………可愛いじゃねえか。

「どうして？」

「助けて欲しいと思ったから」

「知り合いじゃないのか？」

「全然、全く、これっぽっちも赤の他人」

赤の他人に、どうしたらこんな所に連れて来られるんだよ。

「とりあえず、此処から出るぞ」

「あ、うん」

少女は名残惜しそうに、ティーカップを机に置き、机の上のお菓子をワンピースのポケットの中へと仕舞った。

「えへへ」

微笑んでる場合か。

「おいおい、勝手に人の家上がりこんできて大切な客を横取りなんて勘弁してくれよ……」

夢で見たフードの男は、どうやら冷静さを取り戻しているようだっ

た。

「詳しい事情は知らねえけど、こいつは俺の客だったハズだろ」

「うるさいな……これだからガキは嫌いだ」

男の前に50cm程の黒い塊が出現した。

あまりにも現実離れした異質のものだった。

「なんだそれ……？」

「ん？ああ、知ってる。知ってるぞ。その顔」

愉快なものを見つけたように、男は笑う。

「Chainと出逢うのは初めてかな？少年」

「Chain？」

「世界を繋ぐ者、異能を持つ者はそう呼ばれているそうだ。……たしかに怖い。僕だって他のChainと出会えば怖くなるさ。恥ずかしがることはない、あまりにも現実離れしていて初めて見る奴は皆、例外なくそういう顔をする」

黒い球体が何かを吐き出す。

男はその黒い塊が吐き出した鈍色に輝くものを取り出し近づいてくる。

「んーこちら辺じゃこんなものしかないか」

出刃包丁を取り出して。

「まじかよ……」

馬鹿げている、なんでこんな事に巻き込まれているんだ？

昨日まで普通に過ごしていた、ただの高校生でしかない俺が何故こんな目にあってるんだ？

男は目の前で止まり、大きく振りかぶる。

汚れ一つのない包丁が目の前に迫って

「翔生！」

その声と同時に男の腰にタックルをして突き飛ばす。

「ぐっ！？」

「こっち！」

少女の声のする方へ態勢を立て直して走る。

無意識に手を取って

手を

手が触れた。

☐

#

#

☐

思考が記号化する。

急に目頭が熱くなり、涙が止まらない。

頭痛は一瞬で、頭の中へ制御できない程の情報量が流れ込んでくる。

見たことのない風景、知らない人、学校で習った歴史。

その中に、白い髪の女の子がいた。

少女は一人。

いつも少女は一人で世界を見ていた。

誰かと居ても、誰かと見ても、結局彼女はこの風景を一人で眺めていた。

その姿を見て、救われなと思ってしまった。

不条理な世界を憎んでいた俺が。

救いたいと願ってしまった。

身体が熱い。

意識が戻り後ろを振り返ると、男は倒れたまま。

さっき男を突き飛ばしてから、全く時間が経っていないような気がした。

繋いだ手を離さないようにしっかりと握り、翔生はピンク一色に染まる部屋を飛び出した。

「お前……」

「よろしくね、翔生。私はワールドエンド、貴方は世界を繋ぐ者」
何をそんなに満足なのか、謎の美少女は満面の笑みで俺の手を握った。

「それはもう聞いたよ……」

理想へ

必死に走って逃げても、男が追ってくる様子はない。

冷静を取り戻し、この少女、ワールドエンドに尋ねる事にした。

「なあ、本当にお前は一体何者なんだ？なんであんな意味わからん化け物みたいな奴に誘拐されてんだ？」

質問の内容が可笑しかったのか、少女はくすくすと笑って答えた。

「化け物なんて可哀想に、自虐ネタ？」

「自虐って……俺はまともな高校生なんだが」

「それに、あの能力は汎用（utility）であって、破壊（Murder）には程遠い出来だったから大丈夫」

どうやらあの手の奴らには、便利な汎用型の能力と、殺人的な能力と分かれているようだが出来ればマードーとかいう破壊に属する奴には会いたくないな。

「大丈夫って言っても、一歩間違えたらめった刺しされてただろうよ」

「あ、あー……あはは……そうだよ」

「で？一体お前は何者なんだ？」

「ワールドエンド？」

「そう、それ」

「んーそうだなあ……私は世界そのものの姿を体現したものなの、何百年もずっとこの世界を彷徨う観測者……と違うかな？傍観者の方がイメージつくかも」

どちらもイメージがつかない。

「世界のバランスが狂う出来事が起こると、私は私と契約してくれる人を探して世界のバランスを崩す要素を取り除くの」

「それって戦争とか？」

「んーちよつと違うかな？私にもその原因がよくわからないから、まずはそこからなんだけどね」

「信じ難い話ではあるが……あのさっきの黒い塊やら、お前と触れた時に感じたあの意味のわからん感覚、寝てるときに見た映像……嫌でも信じないといけない気がしてくるな」

「そうそう！あの時触れた時に感じたでしょ？世界を」

「どうやら、あの時見たのが世界とやらだった。」

「酷く歪で、狂って、醜悪で、それでいて美しい世界の歴史を。」

「それが契約、私と触れた人が私を繋ぐ」

「ちよつと待て、契約？」

「そう、私に触れる事、そして見る事、声を聞くことが出来るのはChainと呼ばれる特殊な人たちだけ、普通の人々が私に触れちゃうと私の中に取り込まれて、世界の一部としてこの世から消えてなくなってしまうからね」

「そいつはトンデモ設定だな……待て待て。」

「俺は何もないぞ？特殊な能力なんてないし、何か起こった身に覚えもない。特殊な性癖だってない」

「後者は嘘だけだな！」

「私を見る事が出来た時点で、それは特殊なんだよ？そしてそれを私は救世主と判断するの」

「た、ただの偶然だ」

「そう、ただの偶然、だけどそれが重要な。世界を繋ぐなんて偶然の産物でしかないしね。そして私と触れた瞬間、翔生はChainになった」

「は？」

「その能力が何なのかわからないけどね。でも安心して！歴代の人たちはとっても強い人達ばかりだったから。きっと翔生も例外でないハズ！！」

「そんなに目をキラキラ輝かせて、期待の羨望で見られても困るんですけど。」

「そんな触れただけで契約って……さっきの男とはどうだったんだ？」

「それは私の意志が働くからね。選ぶ権利くらい私にだってあるんだから」

そう言つて少女はポケットから先ほど拝借したお菓子をとり出し、袋を開けて口に運ぶ。

「うん！美味しい！やっぱりビスケットはいつの時代も絶品ね」

「で、俺はどうしたらいいんだ？」

「世界をしゅくいま……しよ」

口の中にあるものを飲み込んでから喋ってくれ。

「世界を救いましよ！」

言い直した！？

「具体的に何をすればいいんだよ。心の準備だつて必要だし……正直8割以上理解出来ていない」

「うーん、まずは私を知っている人がいるって事自体がイレギュラーだから……さっきの男とそれを教えた男を探し出す事かな」

俺を殺そうとした人を探して、わざわざもう一度殺されに行くのか。

「次は殺されるかもしれないぞ、さっきのは何とかなっただけで」

「大丈夫大丈夫！」

「世界世界って自分で言つてたけど、お前だつて元は人間だつたんだろ？」

「うーん……」

少女は少し考え。

「忘れちゃった」

と笑顔で答え。

俺には、その笑顔が何だかとても痛々しかった。

それにしても……不自然。

あの時、あの男が帰り道の時のように同じ能力を使えば簡単に追いついてくれるハズだ。

帰り道、黒い塊の中に自分も入れて移動していたに違いない。となる。

「迂闊に家に帰ってないで正解だったのかもしれないな」

「え？」

かなりの遠回りをして、近いうちに大きなショッピングモールが出来る噂の人一人いない工事現場へ移動した甲斐があった。

黒い塊が目の前から出現し、中からフードを被った男が現れた。

「わざわざこんな人気のない場所にすまないね」

右手にはさつきと同じ包丁を持っていた。

「やっぱり付いて来てたのか、お前ワールドエンドをどうするつもりだったんだ？」

「どうもこうもないよ、僕はただのコレクター。今この街で話題になっている連続窃盗事件も僕の仕業でね……欲しいという衝動から逃れられないんだ」

「欲しい？ただそれだけの為に？」

「本当にすまない。謝罪の気持ちでいっばいだけど……君を殺してもソレが欲しいんだ。僕よりたくさん色々なものを持っているあの男を越えるにはソレしかない」

「その男つてのは誰なんだ？」

「神代かぐみと名乗ってたな、一度しか会ったことないからそれ以上は知らない。だが、あの男は異質だった。その男が欲しがるソレを譲ってくれっ！……！」

男がナイフを両手で握り締め、走ってくる。

「らあああああああ……！！！」

あまりにも不手際でいて、大胆。

避けることは容易い。

ただ、避けた時に気付く、後ろに下がらせたワールドエンドがいた事を。

「あ」

ズブリ、と今まで聞いた事のない音が響いた。

少女の細い身体には禍々し過ぎる一刺し、月夜に照らされながら、くの字に少女は痙攣した。

断末魔すら無く、身体を貫いていた刃物を引き抜かれてからは、糸

の切れた人形のようにだらしなく倒れこんだ。
触れた時に見た少女の記憶を探る。

救ってあげようと思ってしまった自分のなんて愚かさ、無力さ。
嗚呼、俺は結局は何が起こっても、何かが起ころうとしても無力だ。
それと同時に湧き出る怒り、これを怒りと呼ばずに何と呼ぶのだろうか。

出逢って間もない人の為に、俺はこんなにも想ってやれるんだ。

「ははは………ほんとにやってやったぞ……くくく、あはははは
ははは……！」

笑い転げる男を余所に、頭の中では目前のフードを被った男を殴り
飛ばす事ばかりイメージしていた。

想像の中の自分は有り得ない速度で走って男を殴り、その衝撃で昔
よく見た特撮の悪役みたいに吹っ飛ぶんだ。
それが理想だった。

『理想到達』

結論から言つと、どうやらそれが俺のChainとしての力だった。

気がつくと男に向かって走っていた。

自分でも信じられない速度で一瞬にして男と距離を詰める。

理想と違うのは相手が動く事と考えたが、そのスピードに反応しき
れていない男は動く事も出来ていないようだ。

「なっ!？」

男が言葉を発する前にすでに拳は男の腹にめり込んでいた。

そのまま男は後ろにある砂場まで吹っ飛び倒れた。

「なんだ今の……?」

まるで自分の身体ではないような感覚、体中が熱く血が煮えたぎる。

想像したのは、目の前の男を吹っ飛ばすだけの力だった。

「それが翔生の能力」

今日一日ずっと聞いているような声がした。

「生きてんのか？」

駆け寄り刺された傷口を見るが損傷はない。

「私は世界そのものの、これくらいの干渉じゃ大丈夫だけど……」

ワールドエンドはフードの男の所まで歩み寄り、その男の胸の上に手を置いた。

「世界に何らかの干渉をしてしまった彼は残念だけど、この世界から退場だね」

男は薄い光の結晶となって、少女の身体へと吸収されていった。

「何やったんだ……？」

「世界を脅かした危険分子として、ワールドレコードという記憶媒体に登録されてしまったの、彼は」

「ワールドレコード……？」

「世界の記録、ブラックリストとも言えるし、宗教的概念だと輪廻と呼んだり、生まれ変わるなんて表現のされ方もあるね」

「死んだって事か？」

「それは直接的な言い回し過ぎるけど、そうだね。そういう事になるのかな」

「そんな……残酷すぎる……」

「そう、残酷。とても残酷なの。だからそれを覚えているのは私だけではないの」

この顔だ。

『私だけが知っている』そういう顔を、触れた時にも、あの夢の中でも、何度も、見た。

夢の中で聞いた『私は……』その先に続く言葉を自然と予感していた。

「私はワールドエンド、この身体は墓場。森羅万象を世界という名の墓場に隠す秘密の器なの。そしてその世界の危機という事は、近

いうちにこの世界の理が乱れ、この世界が消えてなくなってしまう恐れがあるという事」

世界を救うなんて改めて普通じゃない。

だけど、自分だけにしか出来ない事を見つけてしまった。

何も変わらないと思っていた日常が急に動き出した。

きっとこれは特別な事であって、とんでもなく、現実主義から程遠い。

こんな俺でも、報われるようなストーリーは待っているのだろうか？
少し考え、翔生は手を差し伸べた。

さつき手を握った時に言わなかった言葉を少女へ付け加え。

「よろしくな、ワールドエンド」

日常から

結局昨日は家に着いたのが朝日が昇る頃だったせいか、起きてみれば正午。

今日が土曜日で本当に良かった。

あのまま、ワールドエンドを家に連れて来て、空き部屋を一つ貸した。

大きい家とは言えないが、俺一人で住むにはあまりにも大き過ぎる。何度も、何度も昨日（正しくは、今日なのだが）起こった出来事を思い出す。

突然やってきた非日常にも冷静でいられた、あの瞬間までは。

ワールドエンドが刺された瞬間に沸き起こる、怒りと悲哀の葛藤。

決して感情移入できる程の間柄ではない、それなのに何かをしてあげようと願い、実行した。

俺を動かしているのはいつも怒りというスイッチだったのだろうか。憎しみ、恨み、妬み、怒り狂う、酷く醜悪な人間。

世界の不条理を憎み、傍観者でいようとする気持ちとは裏腹に、どうにかしたいと望む矛盾が引き起こした出来事だったのだろう。

「そっぴや、お前普段何処で寝泊りしてんだよ。まさか野宿か？」
食卓に座る白い少女は、当たり前のように答える。

「私は常に移動し続ける事が出来るからね。無意識の移動で世界の声を聞けるから、人が必要とする欲求は遮断できるの」

と、人知を超えてると言わんばかりの説明っぷりだが、なるほど、さっぱりわからん。

「そのわりには、よく食うな」

簡単に目玉焼き、タコさんウィンナー（本人の希望）、米、だけでは物足りず、冷蔵庫にあった焼きソバすらも平らげていた。

「正直理解できねえけど……まあいいか」

どっからどう見ても、ただの若い女の子なのだが彼女も彼女で色々大変だというのは理解したつもりだ。

ワールドエンド、世界の意味として実体化した人間が言う神……ん？そういえば。

「そういえば、名前はないのか？ワールドエンドなんて正直呼びにくい」

「翔生はホントに”希少メン”だね！」

「人を勝手に珍しい男にするな……几帳面の事だろ？」
「それ！」

本当に大丈夫なのか？この世界。

「なんか呼びやすい名前ないのかよ。その名前で呼ぶにも、他の人に聞かれちゃ不味いだろ？先ず呼び難い^{にく}。更に可愛さの欠片もない、なんだよワールドエンドって。絶対に呼び難い。もう一つおまけに呼び難いし、最後に言うとかかなり呼び難い」

「ああああ！もおお！うるさい！翔生！呼び難い呼び難い言わないでよ！これじゃあ”八面楚歌”だよ！」

そんな楚歌は、歴史に載るのも恥ずかしいただの弱いものいじめですよ。

世界とやらは歴史が苦手のようだ。

もう一度言う。

大丈夫なのか？この世界。

「まあ、あるにはあるんだけどね」

と、何処か遠くを見るような目で最初の質問について答えた。

「言いたくないならいいぞ」

何となくだが、この少女はその問いには答えたくないんじゃないか？そんな気がしたんだ。

「ずっと昔の事だから、これが本当の名前かも定かじゃないんだけどね。私の中で覚えてる名前は一つだけあるよ。………アリシア」
少女は噛み締めるようにその名前を呟いた。

大切なものを扱うように。

「でもね、私の名前なんて誰も呼んでくれないの。翔生もきつといつかは忘れてしまう」

「名前なんてそう簡単に忘れないだろ。嫌でもこんな出会い方した奴の名前なんて忘れないと思うね」

少女は何かを思い出すように答え続ける。

「嫌でも忘れちゃうの、私の事なんて、世界の事なんてね……」

駄目だ、俺はコイツのこういうところが苦手らしい。

「アリシア」

「ん？」

「アリシア、アリシア、アリシア、アリシア、アリシア、アリシア、アリシア」

「ど、どうしたの？壊れちゃったの！？」

「覚えたぞ、お前はアリシアだ」

少女は目を見開いて、初めて大声で笑った。

「あははははは、ホントに面白いね。君っていう人間は」

「別に俺は……」

インターホンのチャイムが鳴った。

「ちやいむ！」

「そう、チャイムだ」

昨日ワールドエンド……アリシアには色々と生活していく上でのルールを説明した。

チャイムが鳴ったらお客さんだから、迎えに行くのが今の世界のルールっていう話を覚えていたのだろうか。

どうやら幾ら世界の意味でも、現代には疎い部分も色々あるようだ。

まあ、居留守という究極奥義もあるのだが、それは追々教えよう。

「ちやいむがきたら迎えに行く！」

「そうだ」

待て、待て待て待て待て

駆け足で扉まで向かうアリシア。

「おい！待て！ストップ！」

「お客さんちょっと待っててくださいねー！」

昨日言った教えを守って偉いけど、お前に言ってるんだよ！

近所の人に女の子と一緒にいる事がバレたら厄介過ぎる。

あ、でもアリシアは普通の人たちには見えないんだったな……だつたら勝手にドアが開いた様に見えるのか！？

急いで玄関へ向かう、待ってくれ頼む、きつと明日にはこの家は幽霊屋敷として有名に

「翔ちゃん……この子……誰？」

良かった……見えてるようなら幽霊屋敷としての汚名は逃れられ……ん？

「この……子？」

訪問者であり、幼馴染の天野 月海^{つぐみ}はアリシアを指差し蒼白している。

「私はワールツ」

俺はこの世界の口を閉ざし、奥へ連れて行く。

「ちよつと待っててくれ月海」

「え？」

こいつには聞きたいことがある。

「ぶはあ！苦しかったんだけど！」

アリシアの口から手を放し、俺は小声で問いたです。

「おい、ワールドエンドってのは世界破滅の介入者にしか見えないんじゃないかったのかよ」

「そうだよ？」

「だったらなんで俺の幼馴染の月海が見えてるんだよー！！」

「翔生と契約したら受肉したようなものだよ？全世界の人たちは世界とリンクするの。私と契約した時点で、この世界の情報の器が満たされた状態になって」

「もういい、サッパリわからんけど、お前はみんなから認識されるようになったんだな？」

「うん」

「それを早く言ってくれ……」

「わかった」

何の悪びれた様子もない。

「ここで大人しくしてろ」

「うん」

玄関に戻ると、月海からの質問攻めだった。

「どうして？どうして女の子と一緒なの？それに凄く綺麗な人だったし、外人さん？彼女！？」

「落ちてこう……アイツは親戚だ」

「親戚に外人さんがいるの！？」

「親戚の養子で、俺もたまにしか逢ったことが無くてな……つい最近その親戚が他界してしまったんだ。だからとりあえずウチで預かることになった」

すまん、親戚の秀樹おじさん（34）

「そ、そうだったんだ……大変だね」

「それで、今日はどうしたんだ？」

「えっとね、作りすぎちゃったカレー持ってきたんだ」

そう言って小さい鍋を出した。

たまに月海は、作りすぎちゃったと言っただけ料理をお裾分けしてくれるんだか、結構な頻度で作りすぎちゃうドジ娘だ。

「また作りすぎたのかよ、もっと少なめに作った方がいいんじゃないか？」

「あ、あはは……そ、そうだね」

「まあ、ありがとな」

「いいのいいの！じゃ、じゃあ私はこ、こ、これでええええええええ！」

酷く動揺した様子でいなくなってしまったけど、大丈夫だろうか。

まあ、徒歩5分くらいの距離だし心配もいらな^{ちな}いな。
因みに、翔ちゃんとは、名前あら取ったあだ名らしい、その呼び方だと全く別の人物になってしま^うのだが。

夕食までアリシアから色々な事を聞くことが出来た。

サムライという人たちが存在した時代の話、とてつもなく名前の長い現代では有名過ぎる画家の話、何度も破滅と再生を繰り返すアジアの国の話、蒸気機関車を初めて乗ったのは私と自慢もしていた。どれもが授業で習ったように似ていて、どれもが今まで教わってきた真実とは似て非なるものだった。

これを世界の真理と呼ぶのだろうか、自分だけに知らされた真実であって、とても知り合いに話せる内容ではないが。

契約の為に信じてもらおうと啓治をして、最後には火炙りになったフランスの聖処女。

どの話を聞いても、歴史の背景にはこの少女は存在していた。

すっかり暗くなった夕方、カレーを食べながらも少女との会話は止む事はなかった。

「そつえば、今まで契約してた奴らってどんな能力を持ってたんだ？」

「ん、なんか大きな龍を出したり、なんか滅茶苦茶にする人とか、あ、あの時は街が一つ消えて大騒ぎだったね！あはは」

「……………」

先人の英雄は重度の武闘派だったようだ。

「俺の能力……か」

あの時感じた強い渴望、理想を手にしたあの感覚が忘れられない、家に帰ってから何回かイメージしてみたが、あんなに早くは動けなかった。

「制御と発動は慣れたからね。仕方ないよ」

「俺の能力ってのはどうなんだ？ 今までの中で」

アリシアは悪びれた様子も無く素直な意見で答えた。

「ふっ」

そう言っただけで口へと運ぶ。

世界は俺の事よりも、カレーの方が大事なようだ。

「なんだよ普通って……」

カランッ

とアリシアが握っていたスプーンが床に落ちた。

「おいおい、床が汚れるだ……」

る？

アリシアは光の無い目で立ち上がり、機械的に空虚を見た。

「アリシア？」

「近くにいる」

光を瞳に戻し、口の周りにカレーを付けて短く言った。

「近くでChainが能力を使ってみたみたい」

金色の獣

アリシアの性質上、近場での能力は感知できるらしく、その性質をあてにしてその正体を突き止めることにした。

「Chainつてのは全て例外なく敵って訳じゃないんだろ？」

「うん、だけど変な感じがするの」

「変な感じ？」

「何て言えばいいかわからないけど、とても痛々しい叫びだった」

「ふうん……そんな事までわかるのか」

アリシアの話によると、ここから反応があつたらしいが……。

「ウチの学校じゃねえかよ……」

私立 小波学園さざなみ、伝統のある学校として有名であるが建物自体は6年前に工事によって新校舎となっている。

「こつち！」

「あ、おい！」

校門から中庭の方へと向かうアリシアを追いかけ、そこで立ち止まる。

「なんだこれ……」

猟奇的、そう感じた。

暗くてよく見えないが、きっと死体は二つ。

腕が地面に吸い込まれたように突き刺さり、足が木の枝に引っかかっている。

これを死体と言わずして何と言うのだろうか。

その中心にはこの暗闇でもハッキリとわかる金の髪の青年。

歳は同じくらいだろうか、長く伸びた金の髪に肌蹴たYシャツ、ズボンは闇に溶けている様に黒く、腰に銀の逆十字がぶら下がっていた。

捕食動物のような鋭い瞳が俺とアリシアを捉えた。

「ン？随分と今日は客が多いナ」

身体が動かない、目の前の異常な光景に吐き気がしたが、そんな場合じゃない。

この男はきつと俺たちを殺す、そう確信した。

ゆっくりと歩み寄ってくる男、後退りさえ出来ない。

「な、何してたんだよお前」

やつとの事で紡いだ言葉は恐怖で震えていた。

「何って言われてもなア」

金髪の男は困ったように死体を見て。

「死体が二つあるナ」

何の感慨もなく、何の抵抗もなく、ソレを蹴飛ばした。

「貴方が能力を使ったの？」

「ア？」

アリシアがいつの間にか前へ出て、男と話していた。

「ンー？なんだこのすげー美少女？外人？」

「アリシア！下がれ！」

俺は最大限の声でアリシアへと叫んだ。

「アー、アリシアちゃんって言うのかア、へえー探査系の能力？」

男は目の前の少女と話し続ける。

「いいなア、探査系。俺もこんな能力じゃなくて探査系が良かった

ヨー、その転がってる男なんて俺に向かって何て言ったと思う？

マードーだってヨ、失礼な奴だよナー。俺は狂ってなんかねえのに

サ

「何の為にこんな事したの？場合によっては世界のバランスを乱し

たと私は判断します」

そんなアリシアの声も全然響いていないようだ。

「バランスねエ……そんなもんこの世界にあるのかネ。何の為に

言われても色々あるシー。まあいいか……警察に言われても面倒く

さいシ？死んでもらおうかな？」

男は金色の髪を揺らしながら疾走した。

迅速、文字通りの速さだった。

木を蹴り、アリシアを越え、翔生の首を掴みかかる、目の前の少女よりも男から始末するという見事なまでに慣れた思考回路だった。

「あっ……がっ」

首を絞められ、視界が赤く染まる。

目の前の男の握力は、まるで万力で絞められているかのようなだった。

「翔生！」

アリシアが駆け寄ってくる。

「馬……鹿がっ！逃げ……ろー！」

逃げる？逃がしてどうする？こんな化け物みたいな奴から逃げれるのか？アイツ一人で。

一人……？待てよ？

ブラックアウトしそうな視界の中、急に何かが引つかかった。

身体は言う事を聞かないが思考回路は正常に作動する。

さつきからこの男は”自分が殺した”とはハッキリ言っていない。

それに、何か隠しているような”うやむや”な回答だった。

「お……前の……他に……誰が……いた？」

「ア？」

急に力を込められていた手が緩み、開放された。

「がはっ……げほっごほっ……はぁ……はぁ……」

ありったけの酸素を補充したが、赤みの掛かった視界の回復にはまだかかりそうだ。

「なんで知ってんだ？ここに俺以外の人間がいた事」

男は素直に驚いた顔をしていた。

「アリシア、Chainってのは複数の能力を持つことが可能か？」

「え？ううん、そんなのは例外すぎて聞いたことがない……かな？」

「あの死体、地面に埋まつてる死体と、切断された死体の二つがある。どちらも性質上全く別だ、そう考えればもう一人、誰かいたって不自然じゃないだろ」

一か八かの出鱈目を言ってみて本当によかった。

視界は徐々に良好になっている。

酸素が足りなく、身体に力が入らなかったがそれも回復していた。
「へエ、頭はいいの力」

男は開心したように、もう一度翔生へと手を伸ばす。
これだけ時間を稼げば十分だった。
想像する。

さっきの男を、自分を。

理想を越えるんだ。

身体中の血液が沸騰するような錯覚。

男の手から一瞬で逃れ、アリシアを抱きかかえて移動した。

「翔生？」

「今回はちゃんと下がってるよ」

「へエ、やっぱりChainだった力」

怖い、恐怖が身体を支配している、だが先ほど男に掴まれて意識が遠のく時に感じたものよりは遥かに軽い。

「俺と同じくらい早いナ」

男も疾走する、その姿を目で追い、距離を取りながらスキを伺う。

「でもなア、早いだけじゃ駄目ダ」

男は急に止まり、晒^{わら}う。

知ってる、この顔は自分が常に優越だと疑わない顔だ。

このチャンス逃すわけにはいかない。

「翔生！駄目！！」

拳を作り、男の顔の前で スローになった。

周りの風景は変わらず、目の前の男の身体には遅延した様子がない。
「なんだ……？これ……？」

自分の身体だけが遅延している。体内時間も問題がない、身体が思うように動かなかった。

「ハハハハハ！馬鹿だな？自分で二つ能力がどうこうって言っただ口？俺の能力が身体能力強化だとも思ったの力？とんだお気楽ご都合主義だな」

完全にそう思っていた。

あんな速度で動けるのは能力だと、勝手に決め付けていた。

「残念だったナ、素人。俺の重力からは逃れられないゾ」

男は移動する方向に対して、逆の力の重力をかけ、物体が動く力の働きを相殺していた。

「死んでくれ」

男の拳には重力の渦が巻いている。

その拳が振り下ろされる刹那。

「うおおおおおおおおお!!!」

まだ、理想を追っていた。

この重力を越える速度と力、世界の理から外れる規格外。

「ンだよ……それ」

男の拳より早く、男の顔へと腕を伸ばす。

「!?!?がはっ」

「ぐッ……!!」

翔生の想像以上に、男のパンチは早かったようで掠ってしまった。軽く掠っただけのハズが、軽い脳震盪になっていて、足から力が抜けて倒れてしまった。

まともに喰らっていたらと思うと寒気がする。

男の方を見ると、男は片膝をついていた。

男にも翔生の拳が効いているようだ。

「……ッ……ス……!!」

男は片膝をついたまま、独り言のように何かを呟き続けている。

「ブックロスブックロスブックロスブックロスブックロスブックロス」

呪文のように紡がれる負の感情が翔生に向けられた。

男は立ち上がり、また歩み寄ってくる。

これが、実戦の違いだろうか？

翔生は意識を保つ事に精一杯で、立ち上がることも出来なかった。

「待って!」

アリシアがまた何か言っているようだ。

意識が薄れ始めていく。

「黙し、殺すゾ」

「あなたの探してる人、私なら見つけられるかもしれないよ？」

世界は誰に対しても平等に手を差し伸べるんだ。

鏡の国の

目が覚めた時、最初に見えた光景は樽宮市の街並みだった。

高級感漂う飾り物と、部屋の雰囲気、窓から見る景色は20階建てのビルから見下ろしたかのような光の粒。どうやらベッドで横になっていたらしい。

「いてて……何処だ……？ 此処は」
顎に痛みが走る。

「……アリシア！？」

辺りを見渡しても少女の姿は見当たらない、意識が薄れる寸前に聞いたあの金色の獣のような男が言った言葉を思いだす。

『殺すゾ』

「まさか……！」

飛び上がった瞬間、ドアが開いた。

「翔生！」

急に抱きついてきた少女を抱き止める事も出来ずに、ベッドへと押し戻された。

「アリシア……無事だったのか」

「痛いとはない？」

顔が近い。

「何顔赤くなってるんだ？」

別の声ができる方を見ると、さっきまで殺意満々だった金髪の獣じみた男が立っていた。

「お前……！」

「待って翔生、ここまで運んでくれたのは禾音君なんだよ？」

「禾音？」

「ソ、如月禾音^{かのみ}、如月カンパニー^{きんぎょ}って言えばわかるか？ そのシャツチヨサンの息子だ」

如月カンパニー^{きんぎょ}と言えば、この樽宮市では一番大きいビルを構えて

いる大企業の有名な一族だ。

「いきなり襲ってきた奴がこんな所に連れてきて、何をするつもりだ」

「アー……謝るからさ、ナ？」

誠意が伝わってこないのはこの男の人柄なのだろうか。

「あのね、翔生」

「ん？」

「禾音君は、妹を探してたんだって！」

「妹？」

「でもね、Chainになってから様子が変になって気付いた時には……」

「人を殺し歩いてるんだヨ、家にも帰らないデ」

「じ、じゃあ……あの死体は？」

「一つは妹が殺しテ、もう一つはその現場を見た奴を俺が殺しタ」

「お前も結局は人を殺してるのか？」

「ンー？そういう事になるなア、でもお仕事だからサ」

「仕事？」

「如月カンパニーに癌となる部分は俺が片付けるのサ、今回の妹の件だってそうサ、社長令嬢が人殺しなんて報道されちゃ、如月グループは終わりだネ」

「だからと言って、息子に人殺しなんてどうかしてる……！」

「ソ、どうかしてるんだこの家、でも如月は家に縛られ続ける……」

永遠二」

「俺にはわかんないな」

「わかってもらおうとは思わないサ。さて……我が如月一族ご自慢の殺戮姫、如月亞莉子ありすは何処かナ？アリシアちゃん」

「あの時感じた痛々しい叫び……聞こえるよ」

あの時言ってた声ってのは、禾音の能力ではなかったみたいだ。

「痛々しいねエ……」

「かなり近いみたい……」

「アー、やっぱりカー」

二人は何かに気付いたようで、動こうとはしない。

「どうしたんだ？」

キイイイイイイ。

耳に響く甲高い音がドアの向こうからゆっくりと近づいてきている。何かを引っ掛けながら来てるようだ。

「妹だな、コリヤ」

この男には珍しく、心底困った顔をしている。

耳障りな音が更に大きな音をたてて

壁が斬れた。

それ以外に表現の仕方がわからない。

綺麗に正方形型の壁が倒れ、その向こうには、床から少女の肩ほどもある長い日本刀を握る金色のツインテールの女の子がいた。

「ヨ、亞莉子」

「こうしてお話するのはお久しぶりですわね、お兄様」

「来ると思ってたヨ」

「私^{わたくし}も、ここにお兄様がその少女を匿っていると思いましたわ」

「なんでこの子を探してたんだ？」

「如月の犬であるお兄様にはこの子の価値はわからないでしょう？」

「わん」

まただ、またワールドエンドを知っている人間が現れた。

彼女の存在はこの世界では”存在しない”ハズなのに。

「私はその子を回収して、あの方の元へ持っていかないといきませんの」

あの方？

「俺も亞莉子を回収しないとイケないんだヨー。頼むからお兄ちゃんの言う事聞いてくれ」

「相変わらずですわね。力ずくになりましたよ？」

「だよなア」

亞莉子が刀を構え、禾音の目も鋭くなった。

「こんな足場の悪い場所じゃ不利じゃなくて？お兄様の重力移動じ

や、この床は持ちませんわよ」

「如月妹、そのある方って神代かくみか？」

俺は昨日聞いたばかりの、男の名を口にした。

その名前を聞いた途端に亞莉子の顔が変わり、風が吹いた。

「なんで貴方のような下郎がその名前を知っているんですの？ 貴方誰ですの？」

強く拒絶する顔、しかしここで引くわけには勿論いかない。
理想を象る。

たった2回使っただけで、随分と慣れたのかもしれない。

スポーツでもそうだが、やはり実戦というのは何よりも必要な経験
だな。

「禾音、俺もこの妹さんに用事がある」

「お前、動けるのか？」

神代って男の手掛かりが思ったよりも早く見つかった。

「痛みは理想で越える」

二匹の獣

激しい動悸と目眩が翔生を襲った。

そう何度も使える訳ではなさそうだ。

「その方も能力者ですか？ 妙なご友人をお持ちですわね」

「だロー？」

窓も締め切っているのにこの部屋中に風が吹くという事は、如月妹は風に纏^{まと}わる能力なのだろうか。

金色の獣が部屋に二匹対峙し、急に地面が崩れた。

隣に立っていた禾音はすでにいなく、ほんの一瞬までいた向かいの金髪の少女までも消えていた。

乱舞、それが一番正しい。

獣と獣のぶつかり合い。

男が移動する度に重力の重みに耐えれず床や天井、壁が崩れる。

女は細い体躯には想像も出来ない早さと力で、150cmはある長刀を振り回し続けていた。

入り込む余地なんてなかった。

「翔生、あの子凄く優秀な能力者だよ」

アリシアにはその判別が出来るらしいが、素人の翔生から見てもそんな事は一目瞭然。

いつしか風は吹くだけでは止まらず、嵐のように吹き荒れていた。

「これが……能力者と能力者の戦い……？」

たとえそれが兄妹でも、お互いを傷つけ合えるものなのだろうか。すぐに二匹の獣は衝突を止め、対峙する。

「やはり私たちを阻むのはお兄様、貴方なんですのね」

「随分と物騒な戦い方するナー。刀なんて振り回しちゃ駄目だ口？」

「妹のと言えるんですの？」

人を小馬鹿にするような態度に関しても、この二人は何処までいつでも兄妹なんだとわかる。

「如月妹」

金色の獣は、これ以上の戦いは無理だと察したのか、酷く落ち着いていた。

ここで俺はどうしても聞かないといけない。

「なんでお前たちはアリシアを知っているんだ？」

亞莉子は少し驚いた風に。

「アリシア？ああ、”世界の終わり”の事ですね？ふうん、アリシアって名前ですね。私もそこまで詳しくないので何とも言えませんが……そうですね」

亞莉子は構えた刀を下ろす。

「私の目的なんて貴方如きには言いませんが、その子を所持しているのであればわかっていると思います。……世界の改変と言えはわかるかしら？」

世界の改変？という事だ？

「その反応……貴方もしかして、何も知らずにその子と一緒にいましたの？」

知ってるも何も、昨日出逢ったばかりなんだが。

「因果律が少し狂ったみたいですね。あら嫌だ、あの男の口癖が移ったみたいで気持ち悪いですね」

「世界の改変？お前達が世界を滅ぼすのはわかってるんだ。アリシアを使って何をするのなんてわからないが、もうやめろ」

「世界の滅亡？あははははは、何夢見てるんですの？そんな大掛かりな事、神でもない限りできないでしょうに。私たちは世界を削るんですのよ？」

腹を抱え笑われるが気にもならない、こいつらは異常なんだ。

「世界に本来必要の無いものがあれば、貴方はなんだと思います？」
世界に必要な無いもの？そんなものは決まっている。

「争いごとだ。人が人と争う事で大勢の人たちが死んでしまう」

「お気楽ですね？最近の小学生でもそんな事言うかどうか怪しいですわよ。よく言われませんか？『お気楽ご都合主義者』って」

君の兄からさつき言われたばかりだよ。

「戦争が無くなってしまうえば、他の国の経済は永遠にこのまま。カースト制のこの世の中、人も国も同じですわよ？救われる国と救われない国が存在してこそ、バランスと秩序が成立し、上下関係があるからこそ無駄な争いを最小限に抑える事が出来るんですの」
きつと、これは正しい。

「……」

「そして人が死なないというのは人口は増え続けるという意味で、人が増え続けるという事はもっと大勢の人が死ぬという事ですのよ？食料が減り続け、土地が無くなり続ける。そうすれば、土地や食料が必要になり、争いが起こらないはずがない。貴方は理想を矛盾している」

「君はその答えを知っているんだろう？早く言えよ」

それは現実的な事であるが、理想を求める翔生にとって……その事実は肯定する訳にはいかない。

そんな理屈じゃ……大勢の人がきつと助からない。

「決まっているでしょう？私たち能力者という存在が不必要なのですわよ」

「それは君のような人殺しだろ？」

「例外なくですわ。この力を一人だけが持っているならば、それは特殊。だけど残念ながらこの力を持っている人間は複数いる、それは特殊ではなく、異常ですの」

自分が異端だとも言っているのだろうか。

「この力のせいで、どれだけ多くの人間が傷付き、苦しみ、劣等感を得た事でしょう。他人と違うという事は何よりも恐ろしい」
それは、能力に目覚めてしまった人の悩みなのだろうか。

「その能力を嫌悪し続け、利用して来た人たちが集まったのが私たちの組織ですの」

確かに能力者という存在は全く必要のないものだ。

世界が作ったというならば、それはエラーのようなもので取り除け

るのだろうか。

アリシアを見ると俯いたまま、何も反応を示さない。

「アリシア……どういう事なんだ？」

これじゃあ、まるでアリシアが、ワールドエンドが悪いみたいじゃないか。

「Chainの存在に関しては、私でもどうにも出来ないよ」と、力なく答えた。

「それは貴方がやった事がないからでしょう？あの男、神代は^{かくや}それを可能にすると仰ってましたわ」

そんな奴が本当にいるのか？

神を超越するような存在なんている訳がない。

そんな事が出来るなら、きっと世界はその存在を拒否するに決まっている。

だってこの子は、こんなにも”世界”に優しいのだから。

「……くだらない」

「なんか言いました？」

「くだらない理想だ。とんだお気楽ご都合主義者だなんて言ったんだよ」

「はい？」

アリシアが出来ないと言った。

嘘を付く必要なんてないこの状況で、だったら人を平気で殺すような奴の言葉を信じる必要なんてない。

「お前の目的なんて知らない。事情も知ろうとは思わない、けど……救われない事を誰かの所為にして、出来もしない理想を語ってるんじゃない」

「はあ？貴方自分で何言ってるかわかってますの？」
わかっている。

何の根拠も無い事を口にしてる。

本当に『ワールドエンドが能力者という存在を消す』事が可能だったら、俺はただの道化だ。

だけど、コイツは人を悲しませるような事はきつとしない。

初めて触れた時に感じたコイツの一部、頭の中に入ってきた映像はこの少女が今まで生きてきた風景の一片なのだろう。

傷付いた人に手を差し伸べ、それを傷付けた人にも手を差し伸べ、誰に対しても平等に優しく強くこの世を歩んでいたに違いない。

一瞬一瞬の風景ばかりだったけど、あの光景は俺の記憶に深く刻まれたんだ。

「……それを害悪みたいに呼んで、どいつもこいつも特殊なモノとして扱うのが気に食わねえ。それってお前らがされて嫌な事じゃないのかよ能力者」

「言ったでしょう？それは唯一無二の特殊、私たちとは違うんですのよ？」

「人と違うのは何よりも恐ろしいんだよな？」

「ち、ちよつと……その子を”人”とでも言うおつもりですか？」

あのフードを被った男も、この女も、神代とかいうやつもワールドエンドの何をわかるっていうんだ。

きつとコイツを理解してやれるのは、あの映像……荒れ果てた荒野で泣き、栄えた国で笑い、長らく世界を人と共に歩いてきたアリシアを見た俺だけなのだろう。

「翔生……もういいよ、この子に向かっても翔生が痛い思いをするだけだよ。彼女は一流のマーダーなんだよ」

アリシアは何か感慨深そうに翔生の服を掴むが、その手を翔生は振り払った。

「俺たちと何も変わらないね、ただ少し特殊なだけだ。それは人外ではあるだろうよ、だけどただそれだけだ」

「……………呆れて何も言えませんか……貴方とはきつと何を言っても平行線でしょうね」

再び下ろした刀を上げる。

「人を平気で殺すような奴の言う事なんて信じるかよ」
想像する、理想の自分を。

別人の身体をインストールしたかのような感覚。
さっき見た二人の”動き”を復元。

それだけじゃ足りない。

その動きを凌駕する自分でなければならない。

相手は刃物を持っている。

それもコンクリートの壁を易々と斬ってしまう程の切れ味だ。

鋼鉄の身体をもイメージする。

頭痛と目眩が更に酷くなった。

「見るからに冴えない貴方のような素人を斬りたくないですが、仕方なしですわね」

刀を向け、突貫してきた。

その早さはまるで、プロ野球選手の投げたボールのようだった。

それを上に跳び紙一重で避け、天井を脚で蹴り瞬間速度を上げ、殴りかかる。

背中を完全に取っていても、それだけの条件じゃ指一本触れられない。

金髪の少女は弧を描く様に滑らかに刀を振り、翔生を拒絶した。

目にも止まらぬ速度の斬撃、翔生の身体から数箇所、血が噴きでる。

「ぐっ……!!」

浅い傷で助かった。

金髪の少女は不思議な顔をして追撃を止めた。

「貴方なんですの？今のは電柱もバラバラにする勢いでしたのに」

「電柱よりは硬いって事だろ」

「それにその動き、お兄様みたいで気持ち悪いですわね」

想像したのが禾音の動きだった為か、動きまで同じと感ぜられてしまったらしい。

「お兄様の友達なら手加減などいらないう事かしら？」
さっきと同じ突貫の構えで向かってくる。

「ハッ!!」

鋭い突きを今度は体勢を低くして避ける。

「（きつと二度目は能力を使う）」

二度も見知らぬ素人同然の男に攻撃を避けられた事は彼女にとって屈辱だった。

反射的に警戒意識が出てしまい、金髪の少女は能力を使用する。
風が吹いた。

週末（前書き）

とりあえず、プロローグ的な部分がここで終わりです。

週末

金髪の少女は高層ビルを出る。

如月カンパニー。

強引な財力でものを言わせる社会の裏。

能力者すらも飼いきれぬ金と権力の巣窟。

私はそんな家の娘でありたくない。

私よりもずっと前から能力者だった兄はどう思っているのだろうか？
如月の犬として飼われているお兄様ならわかってくれると思っています。
た。

冗談半分で聞いたあの言葉。

『お兄様はこの家を出たいと思いませんか？』

『思わないナ』

なんの迷いもなく、そう答えた。

お兄様があの時『出たい』とでも言えば、私はすぐにでもお兄様を
連れ出してこの家から出ようと思ったのに。

あの男、如月禾音は現状に満足しているのか、諦めているのか。

如月の名前を守る為だけに、人を殺す事でしか価値を見出されてい
ない事に気付いてないわけがないのに。

それでも、この家に居続けるとするのはどういう事なのだろう。

私にはわからない。

だから私は私のする事を成し遂げなければならない。

携帯電話が鳴った。

ディスプレイには神代の文字。

「ワールドエンド回収は失敗しましたわ。お兄……如月禾音の他に
もう一人Chainがいましたよ？話が違わなくて？」

「やはり……見つけたかワールドエンド」

男は想定内だと言わんばかりに納得し。

「出来れば、契約前に捕獲しておきたかったんだが仕方ない、戻れ」

「神代」

「なんだ？」

「能力者を消すという事を貴方は本当に出来ますの？」

疑うつもりはない、これは自分にも言い聞かせる為の確認だ。

この男は。

「それを君が一番知っているだろう？」

特殊なのだから。

この週末は、随分と場面が一転二転した気がする。

次に見た光景は、いつも見慣れた自室の天井だった。

足元では、すやすやと眠るアリシア。

心配しすぎてと看ていてくれたのだろうか。

身体の調子は特に問題はない。

掠り傷は幾つかあるが、すぐに治るだろう。

「アリシアを守るだなんて大言壮語を吐いた癖に如月妹に返り討ちだなんて笑えるよな……」

髪を掴んでからの記憶がないが、途中で何かされて禾音にでも助けられたのだろう。

女の子の髪を掴む主人公の物語があつたらきつと不評に違いない。

窓を見ると、太陽が昇っていた。

今日は日曜日、明日にはまた学校が始まる。

とんでもない週末を過ごしてしまったな……。

アリシアを起こさないように1階へ戻り、少し遅めの朝食を作る事にした。

『世界を削る』あの言葉が引っかかっていた。

能力者を消すなんてのは別に悪い事ではないように思える。

だけど、能力者の存在には何か理由があるハズだ。

アリシアがその存在について詳しく知っているなら聞いてみよう。

あの時、アリシアは俯いたまま何を思っていたのだろうか。

『私でもどうにもできないよ』

ワールドエンドでも出来ない事を神代^{かくみ}という男はやろうとしている。

……とんだ狂言者だな。

世界、世界と名乗る少女も、直接的な世界の操作は出来ずに、完全に傍観者側だと昨日の夕食時に言っていた。

その立場のワールドエンドが”何かを出来る”ハズはないんだ。

「どちらにしても、早く起きてもらわないと困るんだけど……」

昼休み

月曜日、いつものように学校へ行き、何事もなく四つの授業を終える。

昨日、世界と名乗った少女アリシアと話した内容を思い出す。

アリシアは随分と遅い起床だったが、俺の所為せいでもあるのだから仕方がない。

遅めの朝食を食べ終え、俺の記憶の欠陥を埋める作業の為に昨晚の事を聞いた。

敗因：気絶。

根気には自信があつた分、いたたまれない気持ちになる。
ださすぎる。

そして、如月禾音の妹、如月亞莉子が言つたあの言葉。

「なあ、アリシア。如月の妹が言つた事って本当に出来ない事なのか？Chainという能力者の存在は俺には必要とは思えないんだ」
その存在の所為でお前だつて危険に晒されてるわけなんだろう？

「それはね、きっと能力者がみんな考える事だと思うの。これは『エラー』のようなものなんだって」

「……俺もそう思ってたよ」

「そうなのかも知れないし、そうじゃないかも知れない」

「という事はお前にもわからないのか？」

「うーん……その存在は昔からあるんだけど、私はそれに対して特別な干渉が出来ない様になつてるんだよね」

「干渉？」

「そう、干渉。私は人の未来や過去を改変する事は出来ないの、いくら私が特別だからと言ってもね。それでも人の過去や未来を少なからず感じ取る事は出来るんだよ」

アリシアは続ける。

「でも、それがChainという能力を持った人たちには通用しないみたいなの」

それが、アリシアが言うChainに干渉できない由来なのだろうか。

「私は能力を持つことによって自分を悲観する悲しい人たちをたくさん見てきたの。それは”世界”が作ったバグのようなものだった。そして、出来ることならそんな悲しい思いをする原因を取り除いてあげたいと思った」

「”世界”って言っても、それがお前なんだろう？」

「そうなんだけど、そうじゃないんだよね」

どういう意味なのだろうか。

「私は世界だけど、その世界を作ったのは翔生、君達人間なんだよ？」

人間が世界を作った？

「世界という概念が無い時代に人は生活していた。それから時代の流れによって世界という形が象^{かたど}られていったの」

「……それはこの世、あの世の認識みたいなものなのか？」

「それも世界という概念に含まれるね。そして人間はこの世界を誰かが作ったと考えるようになり、それを作った”何か”を神と呼ぶようになった……」

「それが……アリシア？」

「そう、たくさんの人たちが願った望みの結晶が私ワールドエンド……ってのが私自身の見解なんだけどね……これも本当の事を言えば、わかってないの。私がワールドエンドとして目覚めたのも、もう随分と昔の事だし、翔生が言ってくれたように元は人だったのかもしれない」

「じゃあアリシアって名前は……？」

「それは昔、翔生みたいに私を見る事が出来た特別な人が付けてくれた大切な名前なんだよ」

その時の事を思い出したのか、アリシアは懐かしそうに、嬉しそうに語った。

「そうだったのか……それで、その能力の存在意義はアリシアにもわからなかったのか？」

「うん……私の意思とは関係のない意思が働いていたんだと思う。」

それはきつと私を作り上げたように、人間が作った概念なんじゃないかな」

大勢が願う事で、その存在を助長したのだろう。

やっぱり、アリシアは悪くなんて無いじゃないか。

それなのに、3日前までの俺はどうだ？

何もかも受身で、世界なんて変えられない、残酷だと悲観して、悲劇の主人公気取り。

全て神頼みで、世界の所為、それは神代とかいう奴らと同じだったんだ。

「俺は世界を憎んでいたよ」

「うん、知ってるよ」

「俺に全てをくれた人が、全てを無くしたんだ」

本当に好きだったバスケット。

「全部見てたよ」

それを教えてくれた先輩、目標だった先輩、その人の分まで続けるという現実から逃げた臆病者。

スポーツ推薦で入学した高校だが、勉強の方はトップクラスだった為に退学までは迫られなかった。

それから毎日、バスケ部の部員達の目から逃げるような日々。

「後悔してたんだ、あの日……俺が試合を見に来てくださいって言わなければ……先輩は交通事故なんかに……」

思い出すたびに蘇る罪悪感。

そんな俺の頭を優しく抱きかかえてくれる白い少女。

「違うよ、翔生の所為なんかじゃないよ。あの時翔生が試合に誘わなくても、きつとその人は翔生の試合を見に来ていた運命なんだよ」

運命……か。

そんなの簡単に納得出来るわけないだろ。
それでも、少しは救われた気がした。

世界の改変、それを可能にしようとしている神代かぐみという男。

ワールドエンドと一緒にいるという事で、俺もきつと知られている。
いつ強引な手段で、あの組織の奴らがアリシアを奪いに来るかもわからないのに……俺は呑気に学校へ来ていた。

「よう、親友。また今日もコンビ二弁当か？」

いつものように隆二りゅうじが弁当を持って目の前の席に座る。

「またコンビ二弁当！？翔ちゃん！！ちゃんと栄養のあるものを食べないと駄目だよ！」

幼馴染の月海つきみも隣の席に座って弁当を出す。

栄養だと？塩カルビ弁当に謝れ、俺は380円で奇跡を買ったんだぞ。

……んー、それにしても。

「隆二と月海……お前らって本当に友達いないんだな」

二人は大袈裟に椅子から転びそうになって。

「お前にだけは言われたくねえよ……」

「……うん」

と共感していた。

酷い奴らだ。

俺と隆二は同じクラスだが、わざわざ別のクラスの月海が昼休みに来る必要もないだろうに。

「それにしても翔生、お前なんかいい事あったのか？なーんか機嫌いい感じだな」

「え？そんな事はないけど」

「休日何してたんだよ」

この週末、俺は命を懸けて女の子を守ってたよ。

一人だけが、この状況を楽しんでいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9669z/>

ワールドエンドによろしく！

2012年1月10日22時47分発行